

Revision ACL 再建術の臨床成績

○荒木 大輔 (あらかい だいすけ) (MD)¹⁾, 松下 雄彦 (MD)¹⁾, 星野 祐一 (MD)¹⁾,
神崎 至幸 (MD)¹⁾, 木田 晃弘 (MD)²⁾, 瀧口 耕平 (MD)²⁾, 柴田 洋平 (MD)²⁾,
上田 雄也 (MD)²⁾, 黒田 良祐 (MD)¹⁾

¹⁾ 神戸大学大学院 医学研究科 整形外科

²⁾ 神戸大学医学部附属病院 リハビリテーション部

【目的】

膝前十字靭帯 (ACL) 再建術後約 8% の症例において Revision を要すると報告されるが, Revision ACL 再建術は初回手術よりも臨床成績やスポーツ復帰において劣ることが多い. 今回我々は当科にて Revision ACL 再建術を施行した症例を検討したので報告する.

【対象と方法】

2002 ~ 16 年に当科にて Revision ACL 再建術を施行し術後 1 年以上経過した 80 膝 (男性 49 例, 女性 31 例, 平均年齢 24.3 歳) につき調査した. 調査項目は再受傷機転, 再受傷までの期間, 使用移植腱, Revision ACL 再建術前後での KT-1000 (健患差), Lysholm score, Tegner Activity Level である.

【結果】

初回手術から再受傷までの期間は平均 41.5 ヶ月であった. 71 例に明らかな受傷機転を認めたが, 9 例は外傷歴を認めなかった. 初回手術時使用移植腱は hamstrings 腱 68 例, BTB 11 例, 人工靭帯 1 例であった. Revision 時使用移植腱は hamstrings 腱 43 例, BTB 37 例であった. KT-1000 は術前 6.5mm から術後 1.9mm と有意に改善しており, Lysholm score は術後 85.7 であった. 一方, Tegner activity level は術前 7.0 から術後 5.5 と有意に低下していた. また, 明らかな再受傷歴のある群 (外傷 (+) 群) とない群 (外傷 (-) 群) の術後成績は, KT-1000 は外傷 (+) 群 1.4mm に対し外傷 (-) 群 5.2mm と有意に大きく, Tegner activity level は外傷 (+) 群 5.7 に対し外傷 (-) 群 3.8, Lysholm score は外傷 (+) 群 81.2 に対し外傷 (-) 群 66.1 と有意に低い値であった.

【考察】

本結果から, Revision ACL 再建術は術後比較的良好な安定性を再獲得したが, 活動レベルは低下する傾向にあった. 特に明らかな外傷がない症例は術後成績が劣る傾向にあり, 慎重な治療方針を要すると考えられた.